

地理教材としての地形圖（第二十三）

石見安藝山塊

爰に西部中國山地の一部である石見安藝山塊中の五萬分一地形圖本郷（廣島十三號）を拉し來つて、人烟稀疎の開析高原の地形が吾人の釋明を待つて居ることの多いのと、我等をして地形說明を無理にでもして見たくなる程其の形貌の蠱惑的なのを述べて試る。

中國山地の一般の山勢は巨智部博士の明察された様に「出雲、美作、備中以東は東西、是より

以西は著しく東北東より西南西に向つて居る」角島圖幅地質説明書此の東西より東北東—西南西への趨向

の轉軸は松江より南東に向ひ谷田峠にて主要分水嶺を越へ高梁川に沿うて南東に下る一線である。この高梁川線以西の西部中國山地は又數塊の山塊から成立して居るが、就中著しいものは出雲、備後の山塊と石見安藝より周防に亘る山塊とである。石見安藝山塊は中國山地としては

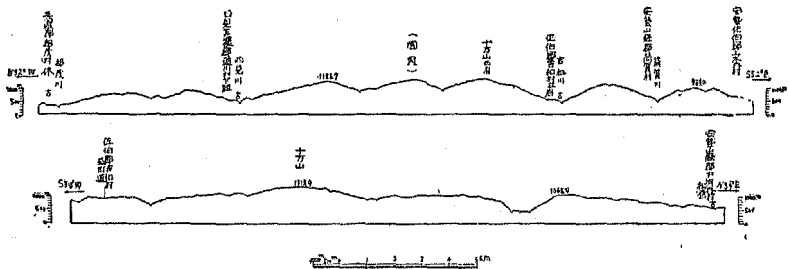
其の形態の最も重々しいもので人文に於ても亦最も發達して居らぬ部分、言ひ換へれば中國開析高原の大宗である。中國の主軸は西走して一旦江ノ川の上流可愛川に斷たれるけれ共再び北東より南西に向ひ駢馳集合せる山聯をなして高聳膨起する。是我が石見安藝山塊で内に羅峙する山顛の著しいものは苅尾山（一二二三米）、大龜谷山（一三四六米）本郷圖葉の中央國界にある、山顛、圖葉には山名を缺く、十方山（一二三一九米）、冠山（一二三三九米）、鬼ヶ城山（二〇三二米）等である。これ等のうち輝石安山岩より成る鬼ヶ城山を除けば恐らく古生層、花崗岩又は花崗質斑岩より成る非火山性の山である。伯耆の大山や但馬因幡交界の水ノ山火山地を除けばこの石見安藝山塊は中國中最も高く且つ廣域を占めた山塊である。本郷圖葉の北に接する八幡原の平地の如きは海拔七百八十米にあつて第三紀鮮新世の準平原の地表を殘存して

居る。

翻つて本郷圖葉を一瞥するに圖中殆んど見るに足るべき平地なく、唯東部に本郷の谷野（アウエ）と西部に匹見の白谷地（サーカス）とがあるのみで、圖葉全體が山である。然かも此の山地の等高線は或る谷側を除けば日本の地形圖として間隔が廣くて恰かも二萬分ノ一地形圖を見て居る感じを與へられる。これは膨れ上つた高まりを表はして居るからで嶄然聳立した山脈や孤峯を示して居るのではないからである。即ちこの地形圖の一瞥から獲られる感じは俊拔でなくて壯重である。殊に圖葉の中央部の山頂は十方山を初めとして甚だしく平たい。

次に地勢の凹凸で第一に氣付くことは此の山地が北東—南西の平行谷によつて正しく分たれて居て七つ許りの山連を明に看取することである。これと共に時に北西—南東の谷があつて深くかの山連を浸蝕して居ることである。従て通路は北東—南西の溪谷に沿うか又は北西—南東に山連の鞍部を越えて前述の谷の通路を直截す

地理教材としての地形圖



圖面斷(郷本號三十島廣圖形地一分萬五)地山國中南部西

る。今本圖葉に南東より北西へと北東より南西へとの二斷面を作ると附圖の様に著しく違つた二つの形態を示す。上圖では一杆半乃至二杆二の略同じ距離を持つた七つの山連は寧ろ饅頭形となつて顯はれる。之に反して下圖では海拔五百米乃至千三百米の高臺が二箇所て深い谷で切られて居る爲めに、十方山を中央として膨れた俎狀をなして居る。

上述の北東—南西の溪谷は西部中國山

地の一般構造即ち古生層の走向竝に之を貫いて噴出した花崗岩、花崗質斑岩、石英粗面岩、玢岩等の各種火成岩の配布が東北東—西南西の方向を取つて居ることから言へば縦谷である。而して稀に此等の平行谷に直交する深い谷は横谷である。此の横谷の谷側は甚だ急峻で且高い事は圖幅の東部にある戸河内村本郷以北の太田川の一支流柴木川シラキで特に明かに看取される。其斷崖の高さは時に六百米に達する。一般に中國山地で風景のよい峽谷は横谷に屬する。長門峽の如きは就中近來喧傳されて居る其一つである。

さて此の直方形に谷で分たれた規矩ある地勢は如何にして出來たか、我々は直に其れが斷層によつて生じたものであらうと答へる。少くとも北東—西南西の平行谷は地殼が横壓力で鑢破つぎやられ (zerreissen) た跡だと考へねばならない言ひ換へれば此等の溪谷に沿うて塊片運動即ち斷層が行はれなかつたとしても後の浸蝕を容易ならしめる裂罅が岩體中に出來て居たとせねばならぬ。近時辻村氏は「日本島一部の高度分布

は大體に於て塊片運動の結果として決定され、浸蝕による變化は全く從屬的である」とされて日本の主要斷層系を捻出されたが、石見安藝山塊の斷層谷は瀬戸内斷層系中の石見斷層谷群として區別された、之を説明されて曰く「石見斷層群—周防より安藝の間にあり……約十五條の斷層谷を存し、主として花崗岩地域を切り方向は東北であつて長さ最大五十軒に及ぶ。此の斷層群には此と直角に交る他の斷層系統の疎に發育するのが特徴である」と喝破されたのは氣持のよいことである (地理學評論三月號)。本郷圖葉説明者に採つては此等の溪谷が果して斷層に當るや否や從來の地質調査によつては明瞭でないし、且つ嘗て石見安藝山塊の地質調査に従事した際には其の南部のみを跋涉して本圖葉の南端を去る三軒の上吉和で雪に閉ぢ込められ、纔に一頭の兎を購ひ得て、寒宿の夜食を辛うじて賑はしたことの追憶があるばかりなので、爰に斷層地形學家の列に伍して浸蝕作用を輕蔑することの出來ぬを大に遺憾とする。

再び本郷圖葉を凝視するに十方山の北陰や深山の南側には構造線上に特有である谷中越(Trailpass)もあるし、匹見川に見る様な谷は一

時構造線を離れて流れるも、北東―南西の構造線は大峠・小峠(共に五萬分一に峠名を缺く)の通路となつてよく正規の方向を表はしてゐることなどを見ると地質構造による以外かゝる規矩ある地貌の要素は出来ないと思はれる。況んや本圖葉内に於ける地質分布を見るに北西の一部は結晶の度緩き結晶片岩系で其の南方は花崗質斑岩であり次は花崗岩地體である。花崗質斑岩と花崗岩との境界は二十萬分一濱田地質圖幅によれば西は匹見の北方より大峠の北を東に走り大龜谷山の南の肩を過ぎて古屋敷に下り、猶ほ東して梶ノ木に達してゐる、かく假令花崗質斑岩と花崗岩とが同じ岩漿から固結したものにもせよ此の兩者の境が北東―南西の幾つかの平行谷を斜斷することから見ると一層北東―南西線が少くとも裂罅であり、即ち本圖幅の地形の主要因子が地質構造力に依據して居ることを地形

斷層家ならずしても肯定して、世論に隨從するの安全なるを想はしめるのである。

言ひ残したが花崗岩地の南方には古生層が露出して居つて其の地帶の西部では花崗岩との境界は南西より北東に互るが、東部では戸河内村清水より上筒賀に互り約東西であつて此の浸蝕に對する持久力の異なつた兩岩の境界は三つの縱谷を斜斷して居る。これも地質分布を遮斷する構造線を肯定さす一つの理由である。

圖葉北西隅の一小部分即ち都茂村大鳥の溪谷以西の山地は其の地形が著しく他の部分と異なつて小皺があり小溪谷が多い。これはこゝが結晶片岩から成つて水蝕谷が多い爲めである。一般に日本で結晶片岩地には水のある小溪が多くて跋涉家をして飲み水に不自由を興へない。

本圖葉内の人烟が如何に依稀たるものであるかは地名の註記に甚しく乏いので直に窺はれる吾々は机上の讀圖ばかりにたよらずに地形圖を携へてこの山地の内容を行きて見ん哉(Go and see)と歎きたくなる。(中村)